

# 図書館だより

北海道大学附属図書館報 第25巻4号(通巻168号) 2003.12.10

vol.25

NO.4

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

朝倉利光

## 2 幻の録音



## 3 戸沼市子 「両手いっぱい言葉」があれば

## 4 徳永良次 高山寺大学

## 5 小島康次 DSMの光と影 —— 作れる心的障害

## 6 本城誠二 ダロウェイ夫人と時間とセクシュアリティ

## 7 図書館利用のポイント お知らせ —— 4年生のみなさんへ

## 8 五十嵐宣勝 カウンターの中から 編集後記

# 幻の録音

文=朝倉利光

(あさくら としみつ/工学部教授)

夏目漱石は、生涯に一度だけ、みずからの語りを録音したことがある。98年前の明治38年10月27日、東京でのことだ。エジソンが発明した円筒型のろう管レコードに、みずからの語りを吹き込んだ。

その事実を、私はたまたま知った。ポーランドの人類学者ピウスツキが樺太流刑時代に、樺太アイヌの民話や民俗音楽などを録音したエジソン式ろう管が、昭和58年夏に再生・解読のため、北大応電研の私のところに送られてきた。このことがニュースとして報道されたのをきっかけに、広島県の中国新聞社記者から、夏目漱石の録音ろう管があるらしいので調査して欲しいとの要請があった。この要請に応じて、昭和59年にろう管所有の広島県加計町の旧家、加計慎太郎氏を訪問したときだった。

ろう管は、加計家の蔵の中にあっただ。先代の正文氏は当時の東大英文科で学んでいたが、林業や鉱山で栄えていた加計家を継ぐため、東大を中退し加計町に帰っていた。しかし、東大時代の師である漱石を慕い、彼に依頼状を出して許可を得たのち、上京してろう管に録音したという。その蓄音機は桐箱に納められ、約80年経ても新品同様の観があった。箱の裏蓋には毛筆でこう書かれていた(原文のまま)。

「此蓄音機は夏目漱石先生に談話を吹き込んで頂くため銀座十字屋楽器店で購めたものである。明治三十八年十月二十七日午後中川芳太郎氏に伴われて本郷千駄木町の先生宅を訪れ玄関の間の奥正面八畳客間の真中の畳へちかに蓄音機を置いて先生に吹き込んで貰った。先生は初め一寸躊躇されたが私が先に明治三十八年十月二十七日と吹き込むと、『これは不折(洋画家)に話す積もりで話せばよいな』と右肘で頬杖をつきながら吹き込まれた。不折は当時耳が相当遠く難聴であった。」

漱石はこの年38才、『吾輩は猫である』を発表している。正文は24才であった。録音内容は、正文の記憶と

して、昭和31年英語雑誌に発表されている。それによれば、漱石は、英語教師をしているのは食うためであること、一高生に英単語condorを冗談に近藤藤鷹と訳してみせたこと、18世紀の英国政治は理解しがたい面があること、などについて1分30秒ほど語ったという。まさに、笑いと皮肉に満ちた漱石の心の動きが伝わってくるようである。

写真(表紙参照)は、使われた蓄音機とろう管(手前中央は漱石ろう管、左側はそのケース)、それらを納めていた桐箱の表蓋(漱石先生録音蓄音機と記されている)である。この蓄音機とろう管は、約110年前の製品で、エジソンの発明によるもので、日本へは明治26年に初めて輸入された。それは長さ約105ミリ、直径約55ミリの円筒型のもので、円周に約400本の音溝がぎざまれ約2分の録音ができた。ただ残念ながら、ろう管はカビ類に覆われていて白くなり、音溝もほとんど見えなかった。これは、正文氏が漱石を懐かしみ、何回となく聴いているうちに、針による摩耗でいたみ、段々と音溝がなくなっただけで、その上、湿気が多い気候と蔵特有の環境により、カビで覆われて劣化してしまった。

漱石の声は再生できるのだろうか。その声はどのような響きを持っているだろうか。声は顔とまさに同様に、その人物について雄弁に物語る資料だ。ろう管に閉じ込められた文豪の声を再びよみがえらせたい。そのような期待をふくらませながら、昭和60年に再び加計家を訪問し、漱石録音のろう管を借用した。しかし、残念ながら、約5年間、北大応電研でレーザー光やいろいろな方法による音声の再生を試みたが、すべて成功することはなかった。ろう管の状態から、無から有を取り出すようなもので、漱石の声の再生は絶望的に思われた。まさに、漱石の録音は『幻の録音』となった。そして、漱石ろう管は永遠の夢を秘めた『幻の録音』として存在しつづけるであろう。

# 「両手いっぱいの言葉」があれば

文＝戸沼市子

(とぬま いちこ／法学部教授)

一瞬にして言葉が切りとって見せてくれる世界がある。本質にせまる言葉がある。「書を拾い、町へ出て」、言葉と歩く。言葉は道づれ世は晩秋、独言と連想。

## 書1『両手いっぱいの言葉』(寺山修司)

うん、そうなんだ、そう、だがよく見るとその横に—413のアフォリズム—とある、これは余計、金言？ 格言？ 何やら説明されると、とたんに気持ちかしぼんでくる。寺山は「論理が通ると作品が弱くなる」とどこかで言っていた。解説はしばしば青年の想像力を萎えさせる。「どんな鳥だって想像力より高く飛ぶことはできないだろう」、そう。「樹の中では血は立ったまま眠っている」、これがある青年の記憶の中で、「血は立ったまま凍る」と驚変きょうへんしていた。鋭敏な想像力がさらに力と凄みを、美さえをも加えた。「美というものは、本来、何かを欠いたものです。完全な合理主義からは、美はおろかドラマも生まれてはきません」。ある言葉を発した者の真意と、全く違っていても一向にさしつかえない。言葉を受け取った者がどこまで高く遠く飛ぼうが、それは自由。

## 書2『永遠の不服従のために』(辺見庸)

手当たり次第に開いた頁。「語ろうとして語りえない存在」、「意味化を拒む天象」、まさにこの晩秋の色合いか。「ものみな晒し、晒しつくし、晒しぬいてくるこの光の束のつよさはどうだ」、「〈目の怠惰〉だけは許してはならない。昼に夜に風景の底を見抜かなければならない」。これらの言葉はそれだけでピツタリとくる。'60年前後に学生であった人間には。

## 歌1「風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去って復た還らず」(荆軻)

人口に膾炙かいしやしたこの歌。はるか昔、教場の隅に座して想像の舞台を見た。目に白装束の壮行の儀と耳に筑の音、易水をわたる寒風の皮膚感覚をも伴って。

## 歌2「我が背子を大和へ遣るとき夜更けて暁露に我が立ち濡れし」(大伯皇女)

やはり昔、一触即そらんじた唯一の万葉歌。謀反を期する実弟大津王子の運命をすでに予見して見送る姉大伯皇女。立ちつくす姿として網膜に像を結んだ。

## 歌3「マツチ擦るつかのまの海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」(寺山修司)

世紀を跨ぎ、突如日常の水面にこの三歌が浮上した。辺見の表現を借りるなら「凝固していた記憶が溶けて」浮上した。テクノロジーの進歩には目を見張るものの、人の心のありようは二千年余を経てさほど変わらない。そこを見誤る倣岸、慢心。

ポール・ニザンは「ぼくは二十歳だった。それが人の一生でいちばん美しい年齢だなどとだれにも言わせない」と言い切った、と中上健次は記している。ふだんは軽いノリでやり過ごしていようと、自他への嫌悪と羞恥と憤り、対する矜持、このせめぎ合いによってやっとな踏みこたえているのが二十歳の時間であろう。「両手いっぱいの言葉」があれば、その時々、どれかの言葉が支えとなる。その言葉から世界が見える。両手にいっぱい、言葉を持ってみよう。

(二十歳の想像力へのエールあるいは遺言として)



# 高山寺大学

文=徳永良次

(とくなが よしつぐ/人文学部教授)

新しくなった京都駅からJRバスに乗り街中を抜け、山道を揺られること約1時間。すっきりと伸びた北山杉に囲まれた「栲尾」のバス停をおりると、鳥獣戯画で有名な高山寺の麓に到着する。ここまでくると普通の札幌では感じられない「ある感覚」に包まれる。

高山寺は華嚴・真言宗を修めた明恵上人の開基になる名刹である。明恵上人の下には多くの弟子が集い、中世における一大学問所となった。そこでは多くの講義が行われ、仏教関係の聖教が書写され、あるいは他の寺院から持ち込まれている。高山寺の僧侶はそれらの聖教を大切に保管し勉学にいそしんだらしい。それは、現存する資料の膨大さからも伺われるところだ。山内に現存する聖教だけでも、国宝・重要文化財に指定されたものが32件1071点を始め、総数一万点以上の第一級の資料がある。その大半は平安時代後期から鎌倉時代にかけて作成されたもので、いかにこの時期に教学活動が盛んであったかが知られる。

その高山寺の資料を調査する「高山寺典籍文書総合調査団」が結成され、毎年定期的に調査活動が行われている。私はその調査団に参加させていただいてから15年ほどになる。調査は夏と春の2回行われるが、どちらも季節としては決して快適とは言えないものだ。夏は、梅雨末期で耐え難い湿度と暑さ。おまけにほとんど無風状態で、じっとしているだけで汗が噴き出して止まらなくなる。それでも、貴重な聖教に汗でも落としてしまっは大変なので参加者は殆どシャツ一枚で一日を過ごす。高山寺調査はお寺に泊まり込んで行われる。体力が許せば夜通し



資料調査をすることができ、思いもかけない発見をすることもあつた。時には、最終日の片づけが始まる直前に重大な事項を見つけ出して胸が高鳴ったこともあつた。春の調査では、京都の街中では桜も咲き始めるのに、高山寺は未だに寒く、寒さが体に染み渡り、かじかんだ手を携帯カイロで暖めながら資料をめくるのである。さらに花粉症の人は北山杉に囲まれたこの寺は地獄のような環境となる。

そんな中、高山寺では調査の合間に「鷹狩り」と称して付近を散歩することがある。本当に狩りをするわけではなく、息抜きに近くの山や沢のあたりをそぞろ歩き、調査の疲れを癒すのである。これが食



事の時間とともに数少ない息抜きとなる。さらに、夕食後に全員が集まって「講説」と称してミニ研究会が行われる。団員各自が研究発表をするのであるが、ベテランも新参加者もここでは対等な立場で発表し、討論し議論を深めていく。学会での発表などとは違って、専門分野が極めて近い少数の研究者による討議は非常に密度の濃いものである。しかも、参考となる資料は目の前にあり、有益なアドバイス、示唆に富んだ発言があちこちから飛び交う。調査団の発足当初から参加している団員の先生はこの場を「高山寺大学」と呼んでいる。そこは、まさに「大学」の名にふさわしい場所なのだ。劣悪だったであろう環境をものともせず日夜勉学、精進を重ねていた初期「高山寺大学（鎌倉時代の）」の学生に、現在の我々の姿はどのように見えているのであろうか。この調査に参加するたびに感じる「ある感覚」とは、ここから来ているのだろうか。



# DSMの光と影 — 作られる心的障害

文= 小島 康次

(こじま やすじ / 経営学部教授)

PTSD、心的外傷後ストレス障害という病名が正式に精神疾患として認められるようになったのは、ベトナム戦争後、帰国した兵士たちの間に見られた独特の神経様症状を病気として行政に認知させるためでもあった。そうした症状は、必ずしも直接戦闘に参加した者ばかりではなく、周囲に起こった極限状況を見ただけの兵士にも少なからずみられた。現在取り沙汰されているイラク派兵の自衛官が、帰国した後の対策や心理面でのケアについて不安を感じる。こうした問題は、表立って議論すれば国民の心配の種を増やすことになるのは確かだが、専門家ばかりでなく、本来、広く国民に知らされるべき問題であろう。

ところで、冒頭に挙げたPTSDが病名として掲載されたのは、DSM、すなわちアメリカ精神医学会によって作成された「精神障害の診断と統計のためのマニュアル」第3版 (DSM-III) においてである。

DSM-I、IIが、100ページ程度の小冊子で、臨床の専門家にとってはほとんど価値のないものだったのは、その前身が精神病院用の統計マニュアルとして作成された、行政・管理用の疾病分類基準に過ぎなかったからである。DSM-IIIが分量も500ページに膨れ上がり、診断基準の記述も詳細なものになった背景には、アメリカ社会の成熟を反映して、外来患者の病状が多様化してきたこと、さらに最も重要な要因として、精神療法に対する保険支払制度が急成長したために、保険会社が診断基準の標準化を求めたことなどが挙げられる。

お蔭で、それまで「落ち着きのない子」だった生徒にADHD (注意欠陥多動症)、「勉強にムラのある子」だった生徒にLD (学習障害)、という病名が与えられ、保険医療の対象とされるようになった。発達上の問題を抱えた子どもたちへのキメ細かい配慮がなされるようになったこと自体は悪いことではない。しかし、他方、「小学校4年生の息子が学校で、先生や友達とうまくいかなくて困っている」=「反抗挑戦性障害」、「高校時代、仲

の悪かった同級生が、今でもオレのことを憎んでいるらしい」=「妄想性パーソナリティ障害」、といったように、ありふれた悩みまで、その気になれば精神疾患とされてしまう危険性も出てきた。保険業界、製薬会社が自らの利益に合致する診断名を求めて、DSM改訂にかかわる研究者、政治家に多額の資金を提供する事態がすでに生じている。実は、もっと大きな問題がある。

DSMは社会の弱者に対する偏見を助長する方向に改悪される可能性を常にもっている。DSM-IIIからDSM-III-R (第3版改訂版、1987年発行) に至る過程で、MPD (マゾヒスティック・パーソナリティ障害) という病名を載せることを強く主張する有力な医学者たちがいた。これは女性に比較的よく当てはまるとされるパーソナリティ障害で、自己犠牲や他者への献身、苦痛に耐え、自己の幸福を先延ばしするような特徴が挙げられている。こうした症状の記述が問題なのは、女性が表面上それらに合致する状況におかれ、自らの力では抜け出せないような男女関係が存在するからである。いわゆるDV (家庭内暴力) と呼ばれる状況に置かれた女性は、男性 (たいていは夫) からの暴力を甘んじて受け、積極的に反撃しないように見える。しかし、それは決して女性がそれを (無意識に) 望んでいるからではなく、より激しい攻撃から身を守るための方便に過ぎない。良心的な医学者やジャーナリストたちの粘り強い抗議、反論によって、MPDは、最終的にDSM-III-R本文からは外された (有力な委員の反撃によって自己敗北型パーソナリティ障害と名称を変えて付録に収められることになった)。

議論の過程の透明度が格段に高いアメリカにおいて、この有様である。戦争を体験し、心に傷を負った自衛官たちに対するケアが、闇の中で、しかも、国民の知らない間に政治権力に都合のいい新たな心的障害を作り出す場とならないという保証はない……このような一文を書いただけで、やがて、強迫被害妄想性人格障害と診断されるかもしれないのだ。

# ダロウェイ夫人と時間と セクシュアリティ

文＝本城誠二

(ほんじょう せいじ／経済学部教授)

1923年ヴァージニア・ウルフはクラリッサ・ダロウェイを主人公とする *The Hours* という作品を執筆していた。2年後の1925年『ダロウェイ夫人』という題で発表されたこの小説は、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』(1922)と並ぶ英語圏におけるモダニズム文学の代表的作品として評価されるようになる。そして74年後の1999年に発表されたマイケル・カニンガムの『めぐりあう時間たち』は3つの時代のダロウェイ夫人を巡って物語が進行していく。1923年ロンドン郊外のリッチモンド、『ダロウェイ夫人』を執筆中の作家ヴァージニア・ウルフ。1949年ロサンゼルス、『ダロウェイ夫人』を読む主婦のローラ・ブラウン。そして現代のニューヨーク、「ダロウェイ夫人」と呼ばれる編集者クラリッサ・ヴォーン。

このように先行作品に依拠する、メタ・フィクショナルな構成のポストモダン小説が1980年代から90年代にかけて少なからず発表された。それは元の作品を換骨奪胎し全く新たな作品に仕上がる場合もあるし、先行作品にただ寄りかかっただけの作品もあった。しかしこのアメリカの男性作家カニンガムによる『めぐりあう時間たち』は1999年度のピューリッツァー賞とペン/フォークナー賞を受賞した作品であり、2002年映画化がなされたことから、その評価は高いと言える。

下敷きとなる『ダロウェイ夫人』において、時間と人間の意識を現代文学の重要なテーマと考えたウルフは物語を12時間という枠組みに限定し、その中で登場人物の意識が現在と過去を往復しながら一瞬一瞬の内に変化していく様子をとらえようとした。『めぐりあう時間たち』においても時間が重要なテーマであることは *The Hours* という原題からも明らかであるし、3人の女性の様々に生きる時間＝人生が描かれる。

狂気の兆しに怯えながら『ダロウェイ夫人』を書くウルフは、最初ダロウェイ夫人が自殺をするという結末を

構想する。しかしダロウェイ夫人の分身ともいえる人物に自殺をさせることによってこの女主人公を生き延びさせるが、作家自身は1941年入水自殺を遂げることになる。ローラ・ブラウンは家族を愛しながらも、充たされない思いから自殺を願望するが果たせず、家族を捨てることで暖かな日常にけりをつける。彼女にとって『ダロウェイ夫人』を読むことはもう一つの世界を生きることを意味し、そのことによって彼女自身の生を持続させる。ということは文学が作家と読者の人生において果たす意義がもう一つの鍵になるだろうか。同性の恋人サリーと暮らすクラリッサ・ヴォーンは、昔の恋人リチャードの病気とその死に際し、生きることの意味を見つめなおす。

そして三つ目のキーはセクシュアリティ。元祖フェミニストとも呼ぶことのできるウルフにとっても性は重要なテーマであった。小説上ではクラリッサ・ダロウェイと女友達とのホモセクシュアルな関係が示唆され、ウルフの実人生においてもその伝記的事実からホモセクシュアルな傾向は明白である。『めぐりあう時間たち』ではローラ・ブラウンはさりげなく、クラリッサ・ヴォーンははっきりと同様の志向を繰り返す。女性たちのセクシュアリティの問題に加えて、現代に生きる男性の性のテーマは詩人リチャードが罹っているエイズに凝縮される。カニンガムは1990年の『この世の果ての家』においてもホモセクシュアルとエイズを重要なテーマに据えていた。現代では性のテーマがヘテロ・セクシュアル(異性愛)からホモセクシュアルへ、さらにはエイズの問題も抱え込んで限りなく錯綜する。

最後に未読の読者のために明言できないが、登場人物の隠されていた関係が結末において明らかにされ、3つの時代設定の意義がさらに明確になっていくことを付け加えておこう。

# 図書館利用のポイント

## ■レファレンス・サービス

大学図書館を十分活用していただくために、レファレンス・サービス（閲覧・参考）係では、教育支援の立場に立ち、以下のサービスを行なっております。ご利用の方は、**本館2階閲覧室グランド側レファレンス・カウンター**を、**工学部図書室はサービス・カウンター**をお尋ねください。

- ① 図書館の利用方法について知りたい。
- ② 文献・資料の所蔵調査として、求めている文献・資料がどこの図書館に所蔵しているか知りたい。
- ③ 相互協力サービスとして、本学図書館で所蔵していない資料を他の図書館へ、「相互貸借依頼」「複写依頼」「他の図書館利用願いの発行」などを行なう。

## ■レファレンスの利用方法

### 1. 受付

- ① 必ず、「**文献検索ツール**」を参照して、事前調査をし、得られた情報を申込用紙にご記入ください。
- ② 情報が得られない場合には、求めている資料が引用されている図書資料かコピーを提示してください。
- ③ ご希望の資料が他の図書館にある場合には、その図書館を直接利用することができますので、係員までお申し出ください。
- ④ 他館からの取り寄せの費用は、自己負担となります。

### 2. 連絡・閲覧

ご依頼に対しての回答および資料の到着の連絡は、適時行ないます。連絡先を明確にしてください。  
また、期限のあるもの（相互貸借図書など）については、ご利用は期限日をもって終了させていただきます。  
なお、期限の延長はしません。

### 3. 文献検索ツール

- ① 本学図書館の所蔵調査      公開検索=OPACでの検索
- ② 他大学図書館等の所蔵調査（NACSIS Webcat）      URL：<http://webcat.nii.ac.jp>
- ③ 国立国会図書館の所蔵調査（雑誌記事含む）      URL：<http://opac.ndl.go.jp/index.html>
- ④ 国立情報学研究所（NII）の情報提供サービス      URL：<http://www.nii.ac.jp/service-j.html>

お

知

ら

せ

### 4年生のみなさんへ ……

最後の定期試験を終えると、3月には卒業となります。忙しいシーズンを迎えますが、図書館からお願いがあります。

借りた図書について、3月19日（金）までにお戻しください。

また、卒業生は、OBとして卒業後も図書館の利用は可能です。卒業後、新たに「ライブラリー・カード」を発行しますので、ご利用の方は、サービス・カウンターを訪ねてください。



# カウンターの中から

文= 五十嵐宣勝

(いがらし のぶかつ/大学院法学研究科 法律学専攻修士課程)

日本の古典文学を代表する作品のひとつとして、『源氏物語』があります。作者である紫式部が描く、男女が織り成す人間模様は、現代においても未だに人々を魅了してやみませんが、その主要人物である光源氏は、実にさまざまな方法を使って女性とコミュニケーションをとり、関係を形成していきます。

社会生活を営む上で、人は他者とコミュニケーションをとり、その接触によって他者との関係を形成していきます。コミュニケーションを取ることで関係を形成するという目的は、多くの人と共生、自己実現のための手段、他者との情報交換など、人それぞれによって動機付けられるものは異なりますが、その目的を実現するためのコミュニケーション行動としては、次の2つから成り立っています。

ひとつは、言語コミュニケーションです。他人に直接会話で伝えることもそうですが、文書による伝達方法、光源氏のように和歌で相手に気持ちを伝えることも含まれます。現代では、通信ネットワークの普及によって、メールや自らのホームページを開設するなど、インターネットを利用した伝達手段もかなり浸透しています。携帯電話のメールでお友達と連絡を取り合うというのは、ごく普通のこととしてなされていますね。

その一方で、非言語コミュニケーションによる自らの意思の伝達というのがあります。これはコミュニケーション全体の約70%を占め、人の表情や、ジェスチャー、さらには握手などの身体的接触によっても、自らのメッセージを伝達、また他者からのメッセージを受容し、理解することができます。サッカーで、選手同士がアイコンタクトによって、ファンタスティックなプレーをすることがあります。

私は4月より図書館のカウンターにて貸出などの手続業務のお手伝いをさせていただいておりますが、利用されるみなさんが、貸出を希望する本をカウンターに持ってきていただき、手続業務を経て、貸出となる、ほんの数秒間の事務手続ではありますが、その間に何かしらのコミュニケーションを取ることができたらな、と思っています。「事務」「手続」というと何か冷たい響きがありますが、それによって図書館における手続というやり取りの中で、利用者であるみなさんと気持ちのよい受け渡しができるような、そのようなコミュニケーションをとることができたらな、と考えています。

到底光源氏にはなれない私ではありますが、今日もカウンターにて、あなたのお越しをお待ちしております。

## 編集後記

『おもしろき こともなき世を おもしろく』

これは、幕末の志士・高杉晋作の辞世の句です。

人生という退屈な時間をいかに面白おかしく過ごすか——現代を生きる私たちに、激動の時代を生き抜いた志士たちの思想を慮るのは難しいことかもしれませんが、素直に歌意を解釈すればこんな具合になるでしょうか。いつの時代を生きる者であれ、心の中に留め置きたい名句だと思います。

ところで、この高杉の句に対して、彼の臨終を看取った望東尼という人物が以下のような下の句を詠み加えたそうです。

『住みなすものは心なりけり』

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第25巻4号 (通巻168号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード